様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ５ 月 ２６ 日現在

機関番号：８０１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０１１５３

研究課題名（和文）高齢者と協働するナレッジ活用型地域資源学習プログラムの開発

研究課題名（英文）The Development of a Regional Resource Learning Program Based on the Utilization of Knowledge in Cooperation with Senior Citizens

研究代表者
青柳　かつら（Aoyagi, Katsura）

北海道博物館・研究部・学芸員

研究者番号：３０４１４２３８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：地域博物館を拠点に、高齢者と協働する地域資源学習プログラムを開発することを目的に、道内博物館園へのアンケート調査、先進事例調査、2モデル地での事例研究を行った。その結果、地域資源学習プログラム集と博物館園アンケート調査報告（報告書1）、回想法サロンと異世代交流の記録集（報告書2）、地域資源マップ、短編映像を製作できた。高齢者が思い出話で交流する、社会的サポートを実感する、文化伝承への意欲形成といった目的の達成や、交流した中学生の知識などの向上、スタッフの多様化、地元自治会のコミュニケーション増といった波及効果が確認できた。福祉関係者の参画、学習の継続化、ウェブでの成果の普及が課題である。

研究成果の概要（英文）：To develop regional resource learning programs in cooperation with senior citizens for regional museums as a base, a questionnaire at museums in Hokkaido and a study on advanced cases and two model cases have been done. As a result, we produced a report on the programs and the questionnaire (report 1), a report on a reminiscence salon and communication between different generations (report 2), a regional resource map, and short films. The survey verified a spillover effect in two aspects. First, the goal was achieved for senior citizens to exchange stories about their past memories, feel keenly aware of the support received from society, and have their willingness to keep up cultural tradition, and second, that junior-high-school students improved on their knowledge, the diversification of staff, and deeper communication of the neighborhood association. Future issues will be welfare workers participation, continuous learning, and the spread of the study production using web page.

研究分野：環境科学　森林科学

キーワード：博物館　高齢者の社会参加　地域創生　地域資源　知識管理

１．研究開始当初の背景

急速に進む過疎・高齢化により農山村では、集落の維持や地域資源の管理が危機に瀕している。北海道では若年女性が 2010－2040 年で半数以下に減る、消滅可能性都市が 147（市区町村全体の 78%，2014 年）を占め、「2015 年危機」を迎えるなど状況が深刻化している。問題の解決には、若者の雇用や住民の地域志向（そこに居住し続けたい志向）、これらのベースとなる地域の誇りや個性を再生することが重要である。

解決策の１つとして、ネットワークや専門性等で強みをもつ博物館が拠点となり、今いる高齢者が持つ地域独自の知識を積極的に活用して地域の個性や誇りを産み出す地域学習を継続化し、地域資源管理の担い手を育成するシステムが必要である。

しかし博物館活動の現場では、高齢者と地域創生を結びつけるプログラムの具体像や地域資源管理の担い手の育成方策等の知見が不足している。

２．研究の目的

本研究では、上記の問題意識から、以下項目を解明・実践し、地域資源学習プログラムを開発することを目的とした。

１）　高齢者と協働する博物館活動の実態把握と課題の明確化
２）高齢者と協働する地域資源学習プログラムの作成
３）プログラムの実践と評価

３．研究の方法

１）　高齢者と協働する博物館活動の実態把握と課題の明確化

①博物館アンケート調査：2015 年度北海道博物館協会加盟 116 博物館園施設を対象に郵送法アンケートを行い、館園の基本的属性、展示や教育普及事業への高齢者からの評価、館園が把握している、高齢者の館園へのニーズ等を調査する。

データの一部は、2003 年度全国調査の結果と比較し、データの経年変化と北海道の地域特性を明らかにする。

②先進事例調査：高齢者向けプログラムの実績がある博物館の学習展開例を現地調査し、プログラムの内容、異なるセクターとの連携手法、後継者育成への対応、地域への波及効果を明らかにする。支援ナレッジを知識移転可能な形式知として収集する。

２）高齢者と協働する地域資源学習プログラムの作成

北海道北部の農山村地域に位置し、人口減少と高齢化が進む 2 モデル地・組織（士別市朝日町：朝日町郷土資料室知恵の蔵運営員会、旭川市東旭川：旭川兵村記念館友の会）で以下を連携実施する。

①地域資源の抽出と地域ナレッジの形式知化：2 モデル組織の普及行事、茶話会の場を活用して、高齢者である会員へ、聞き取り調査する。得られた地域資源の情報を、知識リストの素材として蓄積し、プログラムの題材の候補とする。身体動作を伴う生活技術は、動画記録する。

②プログラム作成：モデル地・組織関係者、当該研究協力者連携のもと、学習カリキュラムを作成し、このカリキュラムに①の成果を当てはめ地域学習プログラムを開発する。

③支援ナレッジの形式知化：プログラム運営や高齢者ケアの上での留意点など、支援ナレッジを形式知として記録して、プログラムに反映する。

３）プログラムの実践と評価

③プログラムの評価：プログラムの実施主体・客体・第三者の意識把握により、学習プログラムの評価を行う。

a．スタッフアンケート：運営スタッフを対象に、学習目標の達成度等を自己評価する。

b．活動参加者アンケート：モデル組織会員、公募型プログラム参加者、高齢者と共に学習参加した中学生等を対象に、学習目標の達成度、プログラムの満足度、健康観、幸福感、地域学習への参加意欲等を把握する。

c．第三者ヒアリング：中学校教員を対象に、生徒の学習前後の態度変容についてヒアリングする。

４．研究成果

１）　高齢者と協働する博物館活動の実態把握と課題の明確化

①博物館アンケート調査

2015 年度北海道の博物館園の特性として、高齢者利用が「多い（19.4%）」「中庸（19.4%）」「少ない（49.1%）」「無関心（12.0%）」といった館園層の分化が見られた。多くの博物館園は、高齢者を展示や教育普及事業のターゲットとしているものの、これら事業における高齢者への訴求力や企画力は弱いと認識していた。この背景に、館園側に、高齢者受け入れのためのソフト・ハード面を整備する資金、人員、ノウハウ不足等があることが明ら

表1　高齢者向け行事企画の際の課題（N=71）［複数回答可］

	回答数	比率（%）
関心はあるが、資金や職員不足、高齢者対応まで手が回らない	33	46.5
アクセスや施設のバリアフリーなどが不十分	26	36.6
高齢者を補助するスタッフが不足	25	35.2
高齢者向けの活動プログラムのノウハウが不足	23	32.4
福祉行政や高齢者関係施設との接点、協力関係が不足	23	32.4
一般利用と異なる点、配慮すべき点などがよくわからない	13	18.3
わからない	4	5.6
特に課題はない	9	12.7
その他	2	2.8

注）「高齢者は普及行事のターゲット」とした館園が回答。回答総数は158、1館園当たり選択肢を2.2個回答

かになった（表 1)。今後、社会の人口減が進行し、高齢者人口が相対的に増加していく中、高齢者利用が活発な館園/そうではない館園で、入館・入園数や集客数等に格差が生じてくる可能性が指摘できる。既述の不足をのり超えるため、高齢者の参画を促して人的協力を得つつ、身近にある地域資源を活用して簡便に実施できる学習プログラムの開発が急務であることが確認できた。

②先進事例調査

北名古屋市にて回想法サロン調査、岩手県宮古市と名寄市にて世代間交流活動調査、鹿児島県垂水市にて地域資源探索ツアー調査を実施した。

その結果、回想法リーダーやコ・リーダーが参加者の主体性を引き出し、彼らの自発的な連想がつながって回想を楽しめる場づくり（北名古屋市、図 1)、年中行事をテーマとする体験講座の講師等、博物館の普及事業の指導者として高齢者を組織化（岩手県宮古市、写真 1)、高齢者の健康長寿をミッションとする行政の福祉部署と連携した心身の健康づくり、地域内の高齢者福祉専攻の学生による自主企画を盛り込む仕組み（以上、名寄市)、地域資源の魅力発見と継続的な学習から農産品加工などものづくりへの展開、異世代交流の楽しさが動機の一つとなり、高齢者、大学、NPO など多様な主体による協働関係の継続化を実現させる仕組み（鹿児島県垂水市）等、運営手法の実際や支援ナレッジを収集できた。

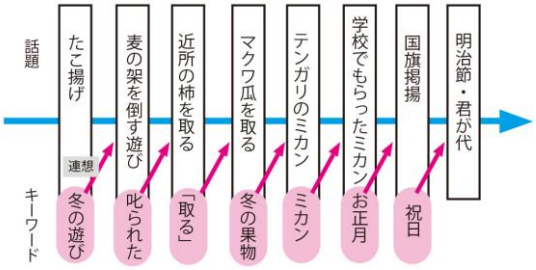

図 1　回想法サロンにおける回想の展開例〔北名古屋市回想法センター〕

写真 1　削り花づくり〔小国分館友の会〕

２）高齢者と協働する地域資源学習プログラムの作成

①地域資源の抽出と地域ナレッジの形式知化

朝日町では、モデル組織の茶話会や個人回想法の場を使用して、「林業労働」「年中行事・食文化」「人生儀礼」にまつわる地域ナレッジを収集した。

さらに身体動作を伴う生活技術として、高齢者である経験者の再現協力を得て、「林業労働」のサブカテゴリー「伐木の道具と技術」「集材の道具と技術」「木直しの道具と技術」にて計 26 本の短編映像を作成できた。

東旭川町では、地域の魅力の再発見、世代間交流と地域文化の継承を目的に、2016 年 3 月にモデル組織内に「地域資源マップ製作チーム（10 人)」を立ち上げ、会議と関連行事の場を用いて、地域資源に関するナレッジの収集とマップ化を実施した。既存の学習成果の活用と製作の役割分担がうまく機能し、その成果は、2017 年 3 月に「ぐるっと東旭川 たんけんマップ」として結実し、1 万部を印刷・配布開始できた（写真 2)。

図 2　完成した「ぐるっと東旭川 たんけんマップ」（抜粋）

②プログラム作成

「ふるさとの文化伝承」「回想法サロン」「地域の魅力を再発見」の 3 区分にてカリキュラムを設定し、朝日町においては、モデル組織の行事および、モデル組織の紹介により、A 自治会主催の独居後期高齢者向け「ふれあいサロン」の場を活用し、プログラムを試行した。

東旭川町では、既述のマップ製作の過程について参与観察を行いながら、「共有」「発散」「構造化」「合意形成」という運営段階を記録し、プログラム化と試行を同時進行させた。

③支援ナレッジの形式知化：プログラムを試行によって、スタッフや参加者の反応から得られた知見、既述のように先進事例調査から得られた知見を、運営上の留意点としてまとめ、プログラムに反映した。

朝日町における、既述「ふれあいサロン」の運営ノウハウについては、参与観察によって得られた、グループ回想法の企画立案の手法や多様な主体の協働関係形成に関する知見を記録化した（表 2)。

表2　ふれあいサロンにおける参画者のはたらき

番号	主体	役割・投入物 INPUT⇨	⇨	獲得物 OUTPUT
1	自治会	企画、物品、参加者介助	ふれあいサロン	安心できる暮らし、支え合い、地域学習
2	社会福祉協議会	資金		高齢者閉じこもり防止、安否確認、交流
3	北海道博物館	プログラム「回想法」、リーダー、記録・評価		地域学習プログラム開発
4	朝日町郷土資料室	プログラム「展示解説」、会場		高齢者利用増、高齢社会での役割発揮
5	知恵の蔵運営員会			
6	保健師	プログラム「心と体の体操」		高齢者の健康長寿
7	交通安全推進員	プログラム「交通安全のお話」		高齢者の交通安全
8	歴史的建造物保存会	プログラム「展示解説」、会場		高齢者利用増、高齢社会での役割発揮
9	北大院生	進行支援		博物館の役割発揮の知見

３）プログラムの評価

①スタッフアンケート

朝日町では、既述「ふれあいサロン」スタッフ 5 名を対象にアンケートを行った結果、「参加者同士のコミュニケーションが徐々に活発になった」「参加者が昔のことを思い出して心の元気を得ていたようだ」「昔の暮らしについて経験者の話を聞くことができた」という三者の回答が各 100.0%と特に多かった。サロンの企画が、参加者とスタッフの双方によい効果があったこと確認できた。また「自治会内で挨拶することが増えた」「パトロール（見守り）の目が以前より行き届くようになった」といった回答も各 80.0%と多数で、サロンの波及効果が見られた。

② 活動参加者アンケート

朝日町では、サロン参加者アンケート（N=15）にて「昔の記憶を思い出した」「楽しい時間を過ごせた」「思い出話でおしゃべりができた」「地域の人とのつながりは自分の支えの一つだ」（各 93.3%）、「またこうしたサロンに参加したい（100.0%）」といった回答が特に多く、設定したサロンの目的が達成できた。さらに「年をとるということは若い時に考えていたよりもよいことだ」とする回答（60.0%）は道北地域居住高齢者の過去の調査結果（北海道社会福祉協議会　2009）の数値（24.3%）を大きく上回り、回答者の主観的幸福感の高さが確認できた。

中学生アンケート（N=25）では、学習テーマ「環境ふるさと学習」を加味し、トビリシ宣言の 5 目標（関心、知識、態度、技能、参加）の達成（5 段階評価）の平均値を学習前後で比較した。 t 検定（両側）の結果、平均値は、知識（前：2.4、後：3.5）、態度（前：3.9、後：4.4）、技能（前：3.2、後：4.0）において有意に向上した（各 $p<0.001$）。今後は、多様な地域資源を題材とした学習活動を継続的に行うことによって、今回有意差の見られなかった関心の増強、環境保全活動や地域づくり活動への参加など、具体的な行動への発展が課題である（写真 3）。

写真 3　中学生総合学習「朝日の山野草を食す」

東旭川町では、マップ製作者アンケート（N=8）にて、「気づいていなかった東旭川の魅力を再発見できた(100.0%)」「東旭川の歴史・文化・自然の新しい知識が得られた(87.5%)」等が多数で「きづき・知識獲得」といった地域学習への効果が見られた。さらに「マップは地域の人々の絆や愛着を育てるのに役立つ(87.5%)」「マップは地域の魅力を子供たちや町外へ伝えるのに役立つ(100.0%)」が多数で、文化伝承への意欲の形成という製作目的を達成できた。

またマップの PR のために開催した、マップ完成報告会（写真 4）での参加者アンケート（N=38）では、製作者による見どころ紹介もあって参加者にマップの面白さが伝わり、上記の製作目的 2 項目の該当は各 95.8%と多数で、製作者－参加者間で文化伝承への意欲が共有できた。

写真 4　マップ完成報告会

③ 教員ヒアリング

学校教員 3 名へのヒアリングの結果、教員は総合学習の目標を「地域に関心を持ち、地域を知ること」「（イメージではなく）体験から具体的な知識を得ること」と設定しており、当該学習が地域資源を素材としていること、高齢者とのコミュニケーションによって地域の自然や文化を実地に学べることを高く評価していた。さらに、学習によって生徒の好奇心が引き出されており、活き活きとした表情を見せたり、作ったしめ縄を自宅で飾るなど達成感が得られているとした。他方で、事前事後学習の充実や生徒の自主学習への

発展が課題である。

４）成果の普及

本研究で得られた成果は、「５．主な発表論文等」の項目にて順次、公表したほか、下記によって普及を実施、または実施予定である。

①北海道博物館総合展示での普及

林業労働や林業用具のうち、鋸に関係するナレッジについては、北海道博物館総合展示第３テーマ・クローズアップ展示「いろいろな鋸」（展示期間：2017 年 8 月 5 日～12 月 13 日）にて、映像アーカイブを含む研究成果を普及した（写真 5）。当該展示は、期間中約 3 万 7 千人の観覧者があった。

写真 5　「いろいろな鋸」〔北海道博物館〕

②普及用ＣＤ、ウェブサイトでの発信

本研究成果の核となる「JSPS 科研費 15K01153 報告書 1. 博物館を拠点とした高齢者と協働する地域学習プログラム集」「JSPS 科研費 15K01153 報告書 2. 士別市朝日町の歴史と文化: 回想法サロンと異世代交流の記録」については、冊子体（報告書 1：300 部、報告書 2：10 部）を印刷製本し、道内主要博物館・郷土資料館、図書館等に配布した。なお本報告書の刊行は、2018 年 4 月 12 日に報道記者発表を行った。冊子体在庫がなくなった後は、普及用 CD によって配布を継続した（写真 6）。

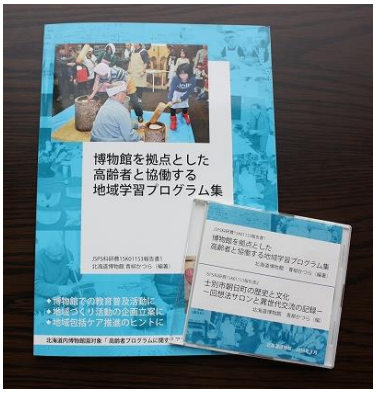

写真 6　刊行した報告書 1 と普及用 CD

今後は、福祉関係者との共同研究によるプログラムの高度化、より多くの博物館で高齢者プログラムを実体化できるよう、成果の普及が課題である。2018 年度には、後継の科研費研究によって、研究成果を無料でダウンロードできるウェブサイトを開設予定であり、道内外の博物館・資料館、地域づくり市民団体、高齢者地域ケア関係者等を対象に、より幅広い普及を実施する予定である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 6 件）

青柳かつら. 旭川市東旭川における高齢者参加型地域資源マップ製作の効果と課題. 第 129 回日本森林学会大会学術講演集. 日本森林学会. 210-210. 2018.

青柳かつら. 高齢者と協働するナレッジ活用型地域資源学習プログラムの開発Ⅱ：独居後期高齢者向け回想法サロンの効果と課題. 第 128 回日本森林学会大会学術講演集. 日本森林学会. 191-191. 2017.

青柳かつら. 高齢者と協働するナレッジ活用型地域資源学習プログラムの開発Ⅱ：独居後期高齢者向け回想法サロンの効果と課題. 北海道博物館研究紀要. 2. 25-38. 2017.

青柳かつら. 地域学習の拠点としての博物館の現状と課題：道内博物館対象高齢者プログラムアンケート調査結果から. 第 127 回日本森林学会大会学術講演集. 日本森林学会. 192-192. 2016.

青柳かつら. 高齢者と協働するナレッジ活用型地域資源学習プログラムの開発Ⅰ：2015 年北海道と 2003 年全国の博物館対象高齢者プログラムアンケート調査結果の比較から. 北海道博物館研究紀要. 1. 87-102. 2016.

池田貴夫・会田理人・青柳かつら・山際秀紀・舟山直治・村上孝一・出利葉浩司・小林孝二. 世代間対話の場としての博物館づくり：総合研究プロジェクト「モノをめぐる価値観の変遷とその多様性に関する近現代史」研究報告. 北海道博物館研究紀要. 1. 103-110. 2016.

青柳かつら. 地域博物館を核とした高齢者と協働する地域学習活動の効果と課題：士別市朝日町の事例. 第 54 回北海道博物館協会研究大会資料（発表要旨集）. 北海道博物館協会. 11-11. 2015

〔学会発表〕（計 4 件）

青柳かつら. 主旨説明「博物館と情報：地域の宝を”掘り起こす・伝える・のこす”」. 北海道博物館協会第 56 回研究大会. 帯広市. 2017 年 7 月 6 日

.

青柳かつら. 旭川市東旭川における高齢者参加型地域資源マップ製作の効果と課題. 日本森林学会. 高知市. 2018 年 3 月 28 日.
青柳かつら. 高齢者と協働するナレッジ活用型地域資源学習プログラムの開発Ⅱ：独居後期高齢者向け回想法サロンの効果と課題. 日本森林学会. 鹿児島市. 2017 年 3 月 28 日.
青柳かつら. 地域学習の拠点としての博物館の現状と課題：道内博物館対象高齢者プログラムアンケート調査結果から. 日本森林学会. 神奈川県藤沢市. 2016 年 3 月 29 日.

〔図書〕（計 5 件）
青柳かつら（編著）. JSPS 科研費 15K01153 報告書 1. 博物館を拠点とした高齢者と協働する地域学習プログラム集. 北海道博物館. 111p 2018.
青柳かつら（編）. JSPS 科研費 15K01153 報告書 2. 士別市朝日町の歴史と文化: 回想法サロンと異世代交流の記録. 北海道博物館. 205p. 2018.
旭川兵村記念館友の会・旭川兵村記念館・青柳かつら. ぐるっと東旭川たんけんマップ. 北海道博物館. 6p. 2017.
青柳かつら. 第 3 テーマ 北海道らしさの秘密. 1 自然の恵みとともに. 1 はばたく！北海道ブランド. .北海道博物館(編). ビジュアル北海道. 73-73. 2016.
青柳かつら・村上孝一. 第 3 テーマ 北海道らしさの秘密. 1 自然の恵みとともに. 4 山に生きる. 北海道博物館(編). ビジュアル北海道. 76-76. 2016.

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
・博物館の地域活動に関するアンケート
（2015.9.6 実施）
http //a-heison.sakura.ne.jp/anke1.html
・博物館の地域活動に関するアンケート
（2015.10.18 実施）
http //a-heison.sakura.ne.jp/151018an.html

６．研究組織
(1)研究代表者
青柳　かつら（Katsura AOYAGI）
北海道博物館 学芸員
研究者番号：30414238

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
池田貴夫（Takao IKEDA）
北海道博物館 学芸員

研究者番号：30300841

(4)研究協力者
（　　）